

[原 著]

## 地域スポーツ活動支援を通じた指導者育成

—知的障害児者対象の「ニコニコ体操教室」参加学生の自己概念に着目して—

花田 道子<sup>1)</sup>, 信田 よしの<sup>2)</sup>

### Leader training through community sports activity support —Focusing on the self-concepts of students who participated in the “Smile Gymnastic Lesson” for intellectually challenged children—

Michiko HANADA<sup>1)</sup> and Yoshino NOBUTA<sup>2)</sup>

#### Abstract

The purpose of this research is to determine how students who worked as teaching staff in the “Smile Exercise Lesson” have changed their self-concept through actual interaction with challenged children and support for their sport activity. Furthermore, this research aims to obtain basic data on the effectiveness of fostering leaders through community sports activity support. “Smile Exercise Lesson” is an event designed for challenged children, which is operated in the university as one of the community sport activities support.

Firstly, as a research method, a questionnaire survey was conducted before and after the students’ participation in the Smile Gymnastic Lesson. The following results were obtained.

Concerning changes in self-concept, no significant change in the self-concept total score or any other factor was observed; however, for students whose total scores were remarkably low before the lesson, the score in every factor, especially the self-recognition, improved significantly after the lesson, except for socialization factor scores. Concerning students’ attitudes after their participation, the highest scores were observed for “understanding of the challenges”, followed by “sense of self-development” and “satisfaction with work”. For students who had never interacted with challenged people before, the event seemed to provide a good opportunity to understand them.

Based on these results, it can be said that the experience in planning, managing, and operating sport events for challenged people provides a valuable opportunity to see the different aspects of sports. It was suggested that this lesson was a great opportunity for children to enjoy sports activity with the help of students. Moreover, it was also a good chance for students to gain a deeper understanding of challenged people through real experience, which could not be obtained through lectures. Moreover, the students’ found their work to be both satisfying and challenging and fostered a sense of self-development.

**KEY WORDS:** adapted physical activity, contribution for community, sports activity support, leader promotion

---

1) 九州女子短期大学  
2) 九州共立大学スポーツ学部

1) Kyushu Women’s Junior College  
2) Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

## はじめに

近年、生涯スポーツやスポーツ環境の整備を目指し、スポーツの場が、学校や企業から地域へと移行しつつあり、地域住民の各年齢層・性別・傷害の有無に影響されないより身近なスポーツ環境の整備や積極的な健康づくりへの支援が求められている。北九州市においても、「北九州スポーツルネッサンス21」<sup>1)</sup> 構想の下、広域スポーツセンターを中核に「総合型地域スポーツクラブ」の整備が進められているが、総合型の地域スポーツクラブにおいては専門性の高い指導者が必要とされている。「総合型地域スポーツクラブ」の理念の一つである「多様な価値観」は障害を持つ人と健常者がともに活動できる環境整備であると理解でき、障害者スポーツ振興の視点からも重要な施策であると考えられる。現在、大学による地域貢献への期待は高まっており、体育科を有する大学として、単に公開講座などを実施するだけでなく、大学が主体的に総合型地域スポーツクラブを運営し、障害を持つ人も安心してスポーツに取り組める環境整備をすることが重要であるといわれている。大学の地域貢献活動は、教育活動や研究活動と並んで、大学に課せられる大きな使命となってきた。

障害者スポーツの領域においては、様々な研究が行われているが、そこで指導スタッフとして参加する学生の心理的な成長に焦点を当てた研究は十分積み重ねられているとはいえない。ボランティア活動者個人の意識変容について、川元<sup>2)</sup> は、ボランティア活動が特定の対象に及ぼす影響（効果）のひとつに過ぎないということを前提にしつつも、「ボランティア活動の活動者個人に対する影響」の実証的研究の必要性を説いている。自己概念について、梶田（1988）<sup>3)</sup> は「自分自身についての流動的な意識に対応した暗黙の構造概念として想定されるもの。」と定義している。さらに、「自己概念のうち自己評定意識が、我々の精神世界において非常に重要な位置を占めているとし、自分自身を肯定的にみているか否定的にみているかは、自他の認識の仕方、さらには自己をとりまく世界の認識の仕方に大きく影響しているものとしている。また、このような自己評価的意識は、個人が日常の中で次々に取り組んでいく欲求充足のための活動や、周囲から課せられた課題をどの程度うまくやれたかという成功、失敗経験とその課題達成を通じてどの程度周囲の人から評価されてきたかという承認、否認経験の蓄積によって形成されていく」と述べている。自己の維持、向上

は、人間の基本的欲求のひとつであり、人間の行動を決定する大きな要因であるといえる。さらに自己概念の変容は個人にとって重要で、意味のある新しい体験によって個人及び外界との接触を通じて起こると考えられている。

従来障害者に対する健常者の認知、感情及び行動的意図を決定する要因についてはさまざまなものが探求されてきたが、その中で最も重要な要因の一つとして障害者との接触経験があげられている。しかし、障害者と接触したからといって、いつでも交流意欲が肯定的な方向に変化するとは限らない<sup>4)</sup>。また、障害者との接触経験が否定的な影響を与える場合として、Cloerkes（1979）は自発性に欠け、その場から自主的に回避できないような接触場面を挙げている。これに対し、ボランティア活動や友人関係のようにそれらの行為を自らの意志で行い、自らの意志で回避できる場合には、良好な対人関係が構築されるとしている。実際、ボランティア活動に参加した学生はそうでない学生に比べ、障害者に対する態度や自己効力感が前向きであることが見出されている<sup>5)</sup>。

そこで、本研究の目的は地域スポーツ活動支援の1つとして実施されている、知的障害児者を対象とした「ニコニコ体操教室」に指導スタッフとして参加した学生が、実際に障害児とかかわりスポーツ支援をすることによって自己概念がどのように変化するかを明らかにし、地域スポーツ活動支援を通じた指導者育成の効果について、基礎資料を得ることを目的とする。この教室は実際に体育系学生が指導スタッフに加わり、企画運営、実施に携わることにより、自己のアイデンティティの確立に大きく影響をあたえるのではないかと仮説をたてた。

## 方 法

### 1. 対象者

調査対象は、指導スタッフとして参加した、体育系女子短期大学生10名（2年生）であり、体験前と体験後に質問紙を配布し、実施・回収した。体操教室実施期間は平成16年10月1日から平成17年2月19日までの、月1回全5回の実施であった。

### 2. ニコニコ体操の概要

この教室は、障害児の体力の向上をねらいとしており、学生が指導スタッフとして企画運営・実施に携わるところに特徴がある。活動回数は、10月から2月の

月1回で、実際の活動時間は2時間となっている。事前に学生は、現場指導教員の指導のもと自ら指導案を作成し模擬実習するなど積極的に準備している。更に、終了後には毎回ふりかえりの時間を持ち、その日の評価及び今後の課題を明らかにし、次の指導に活かしている(図1参照)。

参加者は近隣地区の小学部から高等部の知的障害児者10名(小学部1名・中学部4名・高等部5名)である。

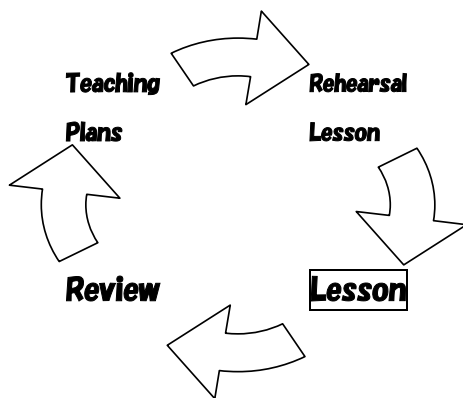


Fig.1 Flow of the leader-training program

### 3. 調査内容

自己概念の変容を見るため梶田(1980)<sup>6)</sup>が作成した自己成長性調査用紙を使用した。この調査は、「自己信頼」「対人・向社会性」「積極的態度」「社会化」「自己認識」の5因子で構成されている。また、参加後の変化について25項目で尋ね、得点化にあたっては、「非常にあてはまる」を4点とし、「全くあてはまらない」を1点とする4段階評価とした。

### 4. 調査手順

第1回目のオリエンテーション時及びニコニコ体操教室最終日、上記の自己概念及び意識調査に関する質問紙を、直接配布・回収した。回収率は100%であった。

### 5. 分析方法

統計処理には、統計処理ソフトSPSS for Windows 12.0を用いた。

## 結果及び考察

体操教室前後の指導スタッフ学生の自己概念の変化

は、表1の通りである。この表は、指導スタッフの総得点・因子ごとの得点平均と標準偏差および対応のあるT検定の結果をしめしたものである。

体操教室前後において、学生の自己概念の変化について自己概念総得点、および因子得点の事前と事後の差(変化量)を算出し比較を行った。自己概念総得点および「自己信頼の因子」「対人・向社会性の因子」「積極的態度の因子」「社会化の因子」「自己認識の因子」のいずれの因子得点についても対応のあるT検定を実施したところ、すべての因子において有意差は認められなかった。

総得点の最も低かったものの結果を図2に示した。5項目中4項目のポイントが高くなり、1項目が低くなっていた。KYさんは、事前調査の自由記述において「中学校の教員になりたいと言う夢を持って入学したけれど、結局夢も希望もなくなってしまい自分が何をしたいかもよく分からない」と答えていた。実際、体験前の自己認識は1ポイント・自己信頼は2.2ポイント・積極的態度も3ポイントと低い点を示している。

この学生は5回全てに参加し、社会化以外のすべての因子においていちじるしく得点が高くなった。山田<sup>7)</sup>によると10代の女性で今後のボランティア活動参加意識があるものほど障害者との親密性が強い傾向を示したことが報告されている。この学生も、5回全てのボランティアに積極的に参加し子どもたちと親密な関係をもてたことが伺える。特に自己認識の因子については、子ども達にうまく伝えるためにはどうしたら良いのか苦労する中で、自分自身を多面的に理解することができるようになったと考えられる。

その一方社会化は体験前5ポイント・体験後3.5ポイントとさがっていた。体験前一人でも生きて行けるという項目に対して「まったくあてはまらない」と答えているが、体験後は「あてはまらない」と若干変化していた。つまり、まったく一人では生きていけないと思っていたのに対し、体験後は少しは自分ひとりで生きていける自信を持ったのではないかと推測される。

参加後の意識について、「人の喜びを自分の喜びとして感じるようになるようになった(3.7)」「成長できた(3.6)」「考え方が変わった(3.5)」「障害者のスポーツ活動を活発にしたい(3.4)」の項目において高いポイントが示されており、意識の変化が起き、意欲の向上につながっていることがうかがえた(図3参照)。障害児を対象として行われたキャンプ報告書の中にも最初は、不安や戸惑いがいっぱいあったが回を重ねるごとにボランティア同士の人間関係は豊かにな

り、子ども達への関り方も上手になっていったこと、ボランティア同士のなかでも学び合いがあり、毎日子ども達と実際に関りながら受ける研修の効果は、そうでない場合に比べはるかに大きなものがあると報告されている<sup>8)</sup>。学生の感想からも、指導の難しさを実感すると同時に、対象者及びスタッフ間のコミュニケーションの大切さを感じ取るなど、本取組が学生に対して教育効果をもたらしていることを読み取ることができた。また、教員における障害理解教育に効果的と考える取組について、障害者との交流やボランティア参加などの接触経験が効果的であると考えた教員が多く、その効果も「思いやりが育つ」という回答が多かったことが報告されている<sup>9)</sup>。以上のことから、自己概念の変化は認められなかったが、障害者スポーツ事業の企画運営、実施に関わるという経験は、スポーツに対する新たな視点を提供する貴重な機会となっていると考えられる。

Table 1 : Results of paired T-tests for total scores and factor scores

	Before Teaching		After Teaching		Paired T-test
	Mean	SD	Mean	SD	
Self-concept total scores (N=10)	72.30	7.63	74.60	6.28	
F1 Self-reliance factor score	15.06	4.86	15.49	4.63	
F2 Interpersonal/prosocial quality factor score	24.64	7.36	25.28	7.56	
F3 Positive attitude factor score	18.34	5.63	18.37	5.51	
F4 Socialization factor score	3.14	1.34	3.04	1.31	
F5 Self-recognition factor score	6.18	2.69	7.03	2.33	

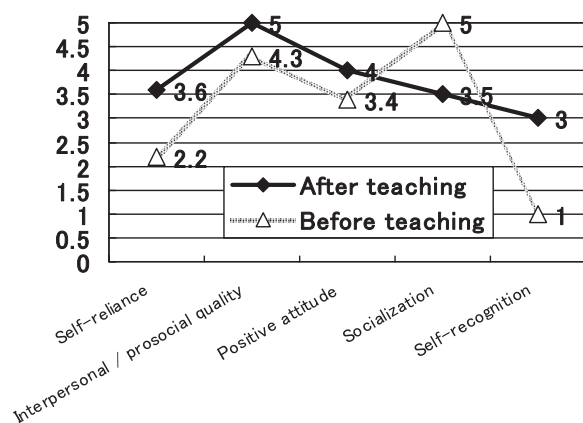


Fig.2 KY's change in self-concept

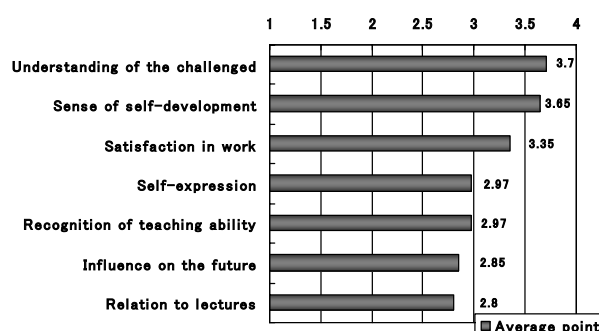


Fig.3 Attitudes after participation

## まとめ

地域スポーツ活動支援の1つとして実施されている、知的障害児者を対象とした「ニコニコ体操教室」に指導スタッフとして参加した学生が、実際に障害児とかかわりスポーツ支援をすることによって自己概念がどのように変化するかを明らかにし、地域スポーツ活動支援を通じた指導者育成の効果について、ニコニコ体操教室体験前と体験後に質問紙調査を行い分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

### 1) 自己概念

①自己概念については、総合的には変化は認められなかった。しかし、始めの総得点が低かったケースにおいては変化がみられた。

### 2) 参加後の学生の意識

- ①障害者に関する理解が深まった。
- ②学生自らが成長したと認識することができた。
- ③学生自身がやりがい・生きがいを感じられた。
- ④自己表現・指導力の未熟さを認識することができた。

したがって、5回の実践だけでは自己概念を変化させることはむずかしいことが分かった。しかしながら、実践することによって教室の中だけでは深まらない障害者への理解が深まり、学生自身がやりがいや生きがいを感じると同時に、自身の成長を認識できていることが示された。さらには、自らの自己表現・指導力の未熟さを認識する機会になっていることも明らかになった。現在、学校においては、ノーマライゼーションの理念を受けて、障害児と健常児が可能な限り一緒に教育を受けるかたちをとる方向で働いている。これまで競技者としてスポーツに関ってきたであろう、将来指導者を目指す学生にとって、スポーツに対する新たな

視点を得る貴重な機会となっていることが伺えた。今後は、接触の質とスキルの獲得について明らかにすることが重要であろう。

#### 参考・引用文献

- 1) 北九州市スポーツ振興審議会 (2001) : スポーツルネッサンス21北九州.
- 2) 川元克秀, 佐藤陽, 菊田英代子, 松尾索, 諏訪徹, 土井進, 中島修, 高野利雄, 柴田博 (1999) : 福祉教育・ボランティア学習学会年報, 4, 82-110.
- 3) 梶田叡一 (1988) 自己意識の心理学第2版, 東京大学出版会, 東京.
- 4) 河内清彦 (2006) : 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について―障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に―教育心理学研究, 54, pp509-521.
- 5) 河内清彦 (1999) : 視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度 (CISES)」の作成. 教育心理学研究, 47, pp471-479.
- 6) 梶田叡一 (1980) : 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 228.
- 7) 山田力也 (2006) : 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究. 西九州大学紀要, pp.11-18.
- 8) 横山正幸 (2005) : いきいきキャンプの子ども達―障害のある子のための野外活動のすすめ―. 学文社, p.186.
- 9) 堅田明義, 梅谷忠勇 (1999) : 知的障害児の発達と認知・行動. 田研出版, pp.161-162.